

東日本大震災での自衛隊の活動

花田 真也

キーワード：東日本大震災、自衛隊



(はなだ・しんや)
 歯科医師
 ICDフェロー

昨年10月に私たちも復興支援を！ということで、私が所属している国際歯周内科学研究会の秋季カンファレンスが仙台で行われました。その時に被災された会員の先生から「あの自衛隊の緑色の車が来てくれたとき、涙が止まらなかった。あいつらはすげえ。どんな瓦礫の山だろうが、道を作りながらどんどん進んでいく。」という涙まじりの言葉を聴きました。とても印象的でした。

東北地方の被災地に派遣されていた自衛隊は陸海空合わせて約10万人。実員22万8500人（2009年3月末現在）の半数近くにのぼります。阪神大震災では、ピーク時でも約1万9千人だと聞いていますので、その規模の大きさがわかります。3自衛隊の中で最多の7万人が派遣されているのは陸上自衛隊です。

私のクリニックのスタッフの義弟が福岡の陸上自衛隊で勤務しており、被災地に派遣されました。震災が起きた日の翌日には東北に向けて出発。実はこの派遣のために結婚式を延期することに…新婦は涙で見送ることになりました。

被災地での活動中、隊員の多くは屋外の天幕で仮眠をとりつつ作業にあたりました。被災者に温かい食事を提供したり、入浴させたりする一方、乾パンやレトルト食品でしのぎ、入浴も派遣2週間で1回、という過酷な日々。その中でもうれしかったのは被災者からの差し入れ。受け取ってはいけなかったのですが、その気持ちがとてもうれしかったそうです。自分たちの方が苦しい状態の中での隊員への心遣い、まさに絆を感じた出来事だったことでしょう。

歌手の長渕剛さんが被災者と自衛隊を励ますために



(写真は防衛庁・自衛隊ホームページより転載)



(写真は防衛庁・自衛隊ホームページより転載)

「乾杯」を一緒に歌うシーンは多くのメディアで紹介されました。多くの方々の記憶に残っていると思います。私はあのシーンを見て、感動して鳥肌が立ちました。自衛隊に救助された保育園児たちが隊員たちに手作りの金メダルを贈るシーンなどもテレビニュースで流れました。

災害派遣を終え、自衛隊員と市民とのお別れ会の様子がyou tubeでも紹介されています。「以前は漠然と自衛隊は怖いものだと思っていたけど、こんなに身近に感じることができました。本当に感謝しています。これからも国のために頑張りたい。」市民たちは

感謝の気持ちを涙とハグで表現していました。

内閣府が今年3月10日まとめた「自衛隊・防衛問題に関する世論調査」で、東日本大震災の被災地救援に10万人態勢で臨んだ自衛隊の活動を「大いに評価する」との答えが79.8%に上り、「ある程度評価する」と合わせて97.7%が評価したと報告しました。また、自衛隊の印象について「良い」（「どちらかといえば良い」を含む）と答えた人は91.7%に上り、前回09年調査から10.8ポイント増えて1969年の調査開始以来最高になったとのこと。

最後に吉田茂元首相が昭和32年に防衛大学第1回卒業式で卒業生に贈った言葉をご紹介します。自衛隊では今もこの言葉が大切に受け継がれているそうです。「君達は自衛隊在職中決して国民から感謝されたり歓迎されることなく自衛隊を終わるかもしれない。きっと非難とか叱咤ばかりの一生かもしれない。御苦労だと思ふ。しかし、自衛隊が国民から歓迎されちやほやされる事態とは外国から攻撃されて国家存亡の時とか災害派遣の時とか国民が困窮し、国家が混乱に直面しているだけなのだ。言葉を換えれば君達が日陰者であるほうのほうが国民や日本は幸せなのだ。どうか耐えてもらいたい」